

二二二

小さ子す愛子
あまえはりそいどんりゆうか、
散としなまる灯うしなで
ゆかの母うキからすりぬけ
腹這つておながをそらし
頭一重ではうんうんいまんた
あまえう笑顔はどえりつたか、

かと蹠岩石のように

あり晴れぞ朝別れをまんま
みるゝ在眼うまえに
母がるい父もるい、
あまえう瞳かくフミリと空を映す、こゝ頭上で
いきなり

あか黒り雲か立つほり
天頂でまくねひかる

あゝ音うるい走りう黒雲、

？？？？

世間につづく幼い問うまえに

誰があの日を語

よ

、

これよ

、

裸う太陽か死むうむじて晴え

炎えよ枝のつぼひ有るうほん道を

降り注ぐ火弾・かり飛小硝子のきらうに
追はれ走る思念うなかで

祈るようは、

いやうのりでは叶まつくせないそりに

心の胸うふくふをひきつこせ

口ぞきりたゞう

やなにはめながおなえによあいはない

ほれぞのうきよ

やわらわうし

ひすしにつるぎのういしか
母子へはまざりん
あまえうめうてうつうてう
あまえんがながな
ほんとへうご

小すい子 あまえい子

あまえはりつたい どこかにいるか、
あまえうと

その執念だけにひかされ

烟ヶ街を走って来る。兩足うちの腐肉に
漬けはじめる蟲を

さみ悪がる氣力もちいままで死んでいたか、母。
ゆれもせぬ火一ソクウ灯で

非常袋を、それがけは汚れも焼けもせぬあまえのため
あたらしい絵本を一頁づつをめながう
「今りたくちり わかねるとすかつらがう」と
ほつりいつた

あまえ、母さん、

母さんのお腹にあまえを置いたまま

南の島で砲弾のハフ烈がふるあはさん、

もうとうさんか てつわく

剣水の宿をぬりこめたやすらぎお腹が

火湯と腰と母さんはふくふあがり
あてような多くの屍とあすかつて七夜を向え
転がなくまつていつた

あき日ウニヒを詠しや

小さり子 あまえい子

あまえはりつて、どこにいるのか

は きつときまえをさかしあし
もうだかたしは や木にまかず
日あいや、うとうさん母さん いとしいゆかを

ひとりひとり引き離し
くじかでしめあげ

やがて蝶のよう

うる殺し

空きこうし

煙き殺し
狂り死せる

あの戦争

どうよんじて日が國を
七日とマウ町を焼く、
おまえの瞳からすがりつく手から
必ずやへもうはるが
ほんとうのそりごとを いふやう

卷之三